

あけのほし 2014 年 9 月

## 「神の意志はどこに？」

菊田 行住

「アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」  
(創世記 13 章 7 - 9 節)

イスラエル軍がパレスチナ人の居住するガザ地区に侵攻しました。今現在停戦中ですが、これまでの戦闘で 2 千人以上のパレスチナの人々が死亡しています。それぞれユダヤ教とイスラム教の 2 つの信仰を持っているわけですが、実はこの両者は同じ唯一の神を信じているという点では共通しているのだということは、あまり認識されていないかもしれません。イスラム教の創始者ムハンマドは神アッラーを、旧約聖書（ユダヤ教とキリスト教の正典）と新約聖書（キリスト教の正典）を通して知られる神に外ならないとし、コーラン（イスラム教の正典）の中でも旧新約聖書について多く言及をしています。そしてユダヤ教徒もキリスト教徒も神の意志に聞き従う者であるといった上では、同じ経典に属する民として考えていました。つまり、旧新約聖書からも神の意志を聞いていたのだということです。このことは、キリスト教を含めて、経典の民は唯一の神を信じ、その神が人類に対して神の意志を言葉によって伝えたのだということを、表しています。ですから、ムハンマドが言うようにそれぞれの信仰の立場から、与えられている神の言葉を素直に聞いたのなら、同じ結論に至るのではないかと考えられるわけです。

しかし、現状としては、同じ唯一の神からその意志を聞いているはずなのですが、それぞれ聞いていることが違うのか、争いが絶えることはありません。これは、キリスト教徒も同じことが言えます。時代は違いますが、十字軍といって聖地エルサレム（信仰上の歴史的な中心地）をイスラム教徒から奪い返そうと、この地に侵攻を繰り返し、多くの血を流しました。この時も、旧新約聖書から神の意志を聞いたはずの人々が、敵から自分たちに与えられたはずの土地を奪い返そうと躍起になっていたのです。そういった意味では、ユダヤ教徒もイスラム教徒もキリスト教徒も、すべて聖書から、我こそ神が与えてくれた聖なる土地の正統な受領者だと、聞いてしまったということになるわけです。

そこで、本当に旧新約聖書は、現在のパレスチナの土地を、多くの人々の血を流しても、奪回しなくてはならないのだと言っているのか、ここで聞きたいと思います。それぞれの信仰者が共通して神の言葉として認めているのが旧約聖書ですが、そこから冒頭の聖書箇所を、見てみたいと思います。ここに出てくるアブラムとロトは叔父と甥の関係になる

親戚でしたが、土地をめぐる争いが起き始めます。そこで注目したいのが、ここでのアブラムが取った行動です。アブラムは、争って自らの利益となる土地を、我先に独占しようとはしませんでした。先にロトの方に行きたいところを選ばせて、そこは競合しない場所に、自分たちの居場所を構えました。つまり、アブラムの信仰というのは、ある土地に固着したものではなく、争いを避けることの方を優先するものであったのです。このことは、言い換えれば土地など何かを所有することよりも、争いを避け、隣人を愛するという生き方の方に、より重きを置く信仰の姿だということです。

所有や土地への結びつきは、確かに人間にとって安定をもたらします。しかし、その事への信望が、返って人の心と体を占有してしまい、奴隷のように縛り付けてしまうことがあるのです。旧約聖書では、このアブラムの信仰こそ、すべての人々が求めるべき姿であり、神はこのアブラムの姿を通して、ご自分の意志を現しているのだというわけなのです。つまり、神の意志というのは、ある土地などにこだわることによって返って争いをもたらすぐらいだったら、いっそその土地をあきらめて、自由に生きる方がよっぽど良いというものなのです。その時、安定が不安定に変わり、安心が恐れへと変わります。しかし、神はある一定の土地に座しているわけではありません。アブラムに現れた神は、アブラムが行く先々のどこにおいても、共におられる神なのです。ですから、神がパレスチナやエルサレムという土地に、特別な価値を持たせて、そこだけがわたしと共にある聖なる場所なのだとは、決して言わないわけです。

聖書が証言する神は、土地やものと結びつく神ではなく、人と結びつく神であります。その事を聞き間違えて、土地をめぐる争うのは神の意志に反しています。神は、争いではなく、隣人を愛することを、何よりも大切なこととして生きることを、わたしたち人間に、望まれているのです。このことは、キリスト教徒の正典である新約聖書でも、しっかり継承されています。今回は、その事は省略しまして、最後にイスラム教徒の正典であるコーランについて述べたいと思います。

あるイスラム教徒の方が講演している集会に参加した時のことです。彼は、母国であるインドネシアで平和運動に携わっていました。コーランの教えの中には、「敵を愛しなさい」というムハンマドを通して語られた神の言葉がある。実はこれが、コーランの中心にあるのだ。だから、わたしたちは神の意志に聞き従って、すべての国の人々と平和を築かなくてはならないのだといった内容でした。そこで、一人の学生が、イスラム教徒による自爆テロについてどう考えているのかと質問したところ、彼はこう答えました。「自爆テロをしている人々は、コーランの教えを聞き間違っている。コーランは一つで、信仰も一つです。その唯一の信仰は、「敵を愛しなさい」という神の言葉を信じることです。わたしたちイスラム教徒は、神の意志に従って、争いを止めなくてはなりません。」そのように答えました。ここに唯一の神の意志が、良く現れているのだとわたしは思いました。